平成３０年度　京都府立西舞鶴高等学校　学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（全日制）　（実施段階）

学校経営方針（中期経営目標）	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点（短期経営目標）
(1) 希望進路を実現できる学力の充実・向上の実現 (2) 規範意識や人権尊重の理念の更なる徹底と生徒の人間力の伸長の実現 (3) 保護者・地域住民の信頼を高める学校づくりの推進	(1)　公開授業の取組や全講座対象の授業アンケートなどを実施し、教員はアクティブラーニングの手法を積極的に取り入れるなど、授業改善の意識が高まっている。これらの取組を生かし、教員の教育実践力を一層高めることにより、生徒に還元していくことが課題である。 (2)　３年生については、進路希望に応じた丁寧な指導を進めることができた。学力向上・進路保障に関して組織的な指導体制の整備と教員個々の指導力向上を図る。１・２年次における学力指導の体制を充実させることが必要である。 (3)　部活動では、地道に努力する生徒と献身的な教職員の支援により、積極的な活動が行われ、全国大会や近畿大会・地区大会での活躍が見られた。また、ボランティア活動や学校行事などの特別活動においても積極的な活動が行われた。学業と部活動が両立できるよう条件整備を一層進めることが課題である。 (4)　生徒が安心して学校生活を送れ、部活動や諸行事にも積極的に取り組む学校として評価を得ている。一方、挨拶の励行、ボランティア活動の活性化、マナー向上、学校生活になじめない生徒の手立てやいじめ問題の予防対策には引き続き重点的に取り組む必要がある。 (5)　地域社会に貢献し、その期待に応える学校づくりを進めている。今後、見やすいホームページづくりや学校便りなどにより、中学生や地域の方に本校生徒の活躍がよくわかるよう情報発信を充実させる必要がある。	○　普通科と理数探究科がそれぞれの特色化を一層推進し、西高ならではの魅力ある学校づくりに努める。 ○　探究活動とアクティブラーニングを取り入れた主体的、対話的で深い学びを推進し、質の高い学力を育む。 ○　「わかった」「できた」という感動を大切に、さらなる高みへと導く学習指導・キャリア教育を行い、希望進路の実現につなげる。 ○　文武両道の校風と挨拶をする文化を大切にし、チーム西高としてつながる力を高め切磋琢磨する教育環境づくりを進める。 ○　命と人権を尊重する態度を育てるとともに、悩みやつまづきを抱える生徒への教育相談や支援を充実させる。 ○　交通ルールやＳＮＳのマナーについての意識を高める教育を推進するなかで、安全と健康を自ら守る態度を育てる。 ○　生徒が主体性を発揮して自己肯定感・有用感を高める場面を増やし、ま　た、活躍する姿を広く発信して積極的な学校広報を行う。 ○　信頼される学校づくりに向けて保護者連携を進めるとともに、教職員の同僚性を高めて指導力向上を図るＯＪＴを推進する。

評価領域		項目（重点目標）	具体的方策	評価			成果と課題
国語科	学習指導	基礎学力の定着に向けての支援	現代語彙、漢字、古文単語、文語文法、漢文句法などについて、小テストを継続して実施し、学習習慣や基礎学力の定着を図る。	A	A	A	３学年とも、漢字小テストを始め、文語文法、古典単語、現代語彙などのテストを実施し、年間を通じて基礎学力の定着を図った。 第１学年では、特に古典文法や漢文句法の定着に多くの時間を取り、古典文学作品を読み解くための基礎的な学習を充実させた。各単元のまとめの中でグループワーク（以下GW）を取り入れたが、GWの形式が根付いておらず、真に効果的な学びになったとは言いがたい。また、大学入学共通テストに向けた取組として、これまでに実施されたプレテストなどを土曜講座で実施して、どのようなものか知る機会を設けた。 第２学年の現代文では、教科書の教材に加え、評論を中心とした問題演習にも取り組ませ、受験に向けた読解力の向上を図った。特に、理系クラスでは科学評論を重点的に読み、要約にも取り組んだ。古典では、生徒の興味関心をひく教材を選定して平安時代の文章に親しむとともに、すべてのクラスにおいて受験に対応できるよう努めた。現代文・古典とも、ＡＬを行ったが、生徒は活発に活動はするものの、真の理解にまでつながったとは言いがたい。 第３学年の現代文では、評論を中心に問題演習にも取り組ませ、読解力向上に成果があった。古典では、『源氏物語』などの難解な文に取り組ませ、個別試験にも対できる読解力の養成に努めた。また、１学期の演習は主に記述式問題を行い、読解力の底上げを図り、マークセンス式への移行は２学期以降とした。なお、受験対策の演習でもGWを恒常的に行い、教師による一方的な説明からの脱却を図った。
			学習を苦手とする生徒への支援を、担任や他教科と連携して行う。	B			
		進路希望実現に向けての支援	集団、または個別の作文指導を通して、自らの主張を論理的に構成する力を養う。	A			
			論理的な現代文や、古典文学作品へのアプローチの仕方を身に付けさせ、どのような文章であっても読解できる学力を育む。また、問題演習を通して、記述問題や客観問題への対応力を向上させる。	A			
	授業改善	新学習指導要領、新ﾃｽﾄへの理解を深める	「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニングの視点）」をはじめ、新学習指導要領への理解に努める。また、大学入学共通テスト（新テスト）に向け、読解力・表現力の新しい方向性を明らかにしていく。	B	B		
		ＡＬの視点からの授業改善	総合的な学習の時間と連携し、「主体的、対話的で深い学び」を実践するため、国語総合の各単元においてＡＬの手法を用いた学習活動を実施する。また、国語総合だけでなく、全ての科目の全ての単元においても、同様の学習活動を模索する。なお、ＡＬ導入の際には、「活動あって学びなし」の状態に陥らないように留意する。	B			
地歴・公民科	学習指導	生徒の進路希望の実現	個に応じた指導を充実し、生徒が主体的に取り組める効果的な課題を提供する。	A	A	B	・クラス全体に配布する課題だけでなく、個人の進路希望に応じた課題を提供し、自ら学習する意欲を喚起した。 ・各教科担当が各科目の模試やセンター試験の過去問を分析し、課題を提供したり、ポイントを押さえた授業を実践した。 ・進路指導部から提供される模試結果を分析し、課題を把握した。ただ単位数が少ない科目では、課題克服の授業改善まではできなかった。 ・公開授業は積極的に行ったが、同じ教科同士で授業が重なるなど、なかなかお互い授業を見ることができず、研究協議もできなかった。 ・新しい学習指導要領に向けて、生徒の主体性を重んじる授業の工夫を試みたが、まだ完璧ではない。今後も研究を続けていく必要がある。
			模擬試験やセンター試験など各種試験でしっかり結果を出せる指導を行う。	A			
			模擬試験の結果を分析し、生徒たちの学習課題を踏まえ、授業改善に努める。	B			
	教師のスキルアップ	教科指導力の向上	公開授業を積極的に行い、研究協議を通じて指導力を向上させる。	B	B		
			生徒の「思考力・判断力・表現力」を育成する授業の工夫を研究する。	B			

数学科	授業	希望進路を実現できる基礎学力の定着	普通科と理数探究科の特色をを意識しつつ、アクティブラーニングも取り入れた質の高い感動のある授業を展開する。	A	A	A	○普通科1年４，５組においてテスト後班単位で解答を見ながら互いにわからないところを教え合う授業を取り入れた。 ○緊張感のある授業を心掛け授業規律を確立することができた。 ○授業については基礎、基本を疎かにせず、週末には課題を与えた。また、長期休暇後は春、夏、冬ともに課題テストを実施し、学力の定着を図った。 ○考査前には不振生徒を中心に基本問題演習を行い、基礎学力の向上に向けた取り組みを行った。
			基礎基本をおろそかにせず、教科書の内容をしっかりと理解・定着させ、さらなる高みへと導く。	A			
			居眠り、私語を許さず服装等にも気を付け、授業規律を確立する。	A			
			傍用問題集の活用や日々の宿題、週末課題等による授業と連携した家庭学習の習慣化に努める。	A			
		希望進路を実現できる一段高い学力の充実	２、３年生においては、センター試験を意識した問題や課題を与え希望進路実現に向けた学力の向上を図る。	A	A		○3年理系、理数探究科では授業進度を早め演習時間を十分にとることができた。 ○2年生全クラスで毎週2回朝学習を実施しマーク演習を行った。（年間５０回程度） ○2年理数探究科では11月から月一回範囲を決めセンター対策試験を行った。 ○授業内や課外において入試問題を用いた講義演習を行った。
			日々の授業の中でも教科書の内容に加え、問題集の中から入試を意識したより発展的な課題を与える。	A			
			週末課題や課外において国公立２次や難関私大等の入試問題などを活用しレベルの高い大学に対応できる学力の充実に努める。	A			
	教材研究	指導力の向上	公開授業等を活用し分かりやすく、関心・意欲が高まる授業や基礎学力の定着および発展的学力充実のための指導法についての教科内研修を行う。	A	A		○予備校で開催された教員向けの講座を受講し授業の中で生徒に還元することができた。 ○１年普通科では試験を統一し評価のあり方を改善した。 ○理数探究科問題解説、中学校向け授業等校外にも発信した。 ○今後も評価のあり方を研究していく必要がある。
			普通科、理数探究科の生徒に対する指導法および評価のあり方をより良いものとなるよう更に研究する。	B			
理科	学習指導	基礎学力の定着	各単元のねらいを明確にし、学科・コースに応じた指導内容の精選及び重点化を図る。	A	A	A	理科の学習内容が以前に比べて格段に増加している上に、教科書が改訂されるたびに新しい知見が増え、限られた授業時間の中で、授業内容を精選して行う必要がある。そのためにも、学科やコースごとに設定された進路目標をより明確にし、同一コースを担当する教員同士が今後もより密に連携して、重点的に教える内容を吟味し、授業進度も頻繁に連絡を取り合いながら進めていくことが求められる。成果としては各小教科ごとに実験・実習の授業を組織的・計画的に実施することで、探究する態度の育成に努めることができた。また、理数探究科を中心に、フィールドワークや社会人講師を活用し社会に目を向けた体験授業を実施することができた。推薦入試合格者の課題に対する助言、指導を行った。学科、類型、コースに応じた評価のあり方が課題として残り、今後も議論の必要性を感じる。尚、新課程入試については、今年度目立った取り組みを行うことができず、次年度への課題としたい。
			生徒の実態把握に努め、基礎的・基本的な知識および技術の定着を図る。	A			
			実験レポートや課題等の提出物を確実に提出させる。	B			
		教材研究	観察や実験を通して、自ら学ぶ楽しさや喜びを体験することができる学習活動を企画し実施する。また視聴覚教材の有効活用を図る。	A			
		評価方法の研究	実験・実習の評価方法を研究し、生徒の実態に応じた適切な評価ができるように工夫する。	A			
	専門科目の充実	希望進路実現に向けた学力の充実	授業進度を確認しながら、計画通り教科内容の履修が進むよう担当者間での連絡・連携を強化する。また、問題演習等を通じて問題を解く力の育成・定着を目指す。	B	A		
		探究的態度の育成	民間・公的機関研究所、および大学との連携を通じて理科に対する興味・関心の喚起を図る。	A			
	研修	新課程入試の研究	新課程入試の出題傾向やセンター試験廃止後の大学入試制度に関する情報収集に努めるとともに、さまざまな研修の機会を活かして、教科指導力の向上に努める。	B	B		
保健体育科	体育	生涯スポーツ	選択種目において、各種目の楽しさや特性を体験し、生涯スポーツに繋げられるように指導する。	A	A	A	（成果） 各種スポーツの特性を理解させ、種目ごとの楽しさを感じさせられる指導ができた。また、タブレットを活用し、自らの動作を視覚的に知らせることにより、自己肯定感や自主性などの向上を図れた。 （課題） 生徒同士でリーダーとフォロアーの関係ができており、常にフォロアーになる生徒が積極的に自らの意見を述べられる授業展開ができなかった。また、安全第一で指導しているが怪我０にはならなかった。
		体力、技能の向上	運動への興味関心を持たせ、技能や体力の向上につながる指導に努める。また、「できた」「わかった」など生徒の成功体験を褒め、生徒が自己肯定感や有用観を感じられるように指導する。	A			
		自主性、社会性、協調性の育成	アクティブラーニングを積極的に取り入れ、他者の意見を理解し、自らの意見を的確に伝えられるように指導する。	B			
	保健	健康で安全な生活を送る資質や能力の育成	年度当初に交通ルールについて指導し、安全な生活を送れるように指導する。	A	B		（成果） ICTを活用して指導することで、生徒により具体的に内容を理解させることができた。 （課題） アクティブラーニングを積極的に取り入れた先生とそうではない先生との差があった。また生徒がICTを積極的に活用できる環境を作りたい。
			アクティブラーニングを積極的に取り入れ、自ら課題を見つけ、健康に生活できる資質や能力を身に付けられるように指導する。	B			
		情報の収集と、その情報を処理し表現できる力の育成	ICTを活用して課題発表をさせ、自らの知識や情報をわかりやすく伝えられるように指導する。	B			
	総合体育	体育系学部への進学	体育系学部の実技試験に対応した基本の技能を習得するとともに、各種の技能習得にむけた効果的な指導法を立案し、実践できる力を身に付けられるように指導する。また、指導法や練習法について指導をする。	A	A		選択者が6人と少なかったが、自らの課題や興味を持っている内容について実践研究発表を行うことができた。しかし、体育系学部に進学する生徒が少なく、実技試験に向けた技能の習得はできなかった。
	体育的行事	体育的行事への積極的参加の意識向上	体育祭や球技大会において、生徒の自主性を育てるとともに、集団のまとまりや絆を感じられるように全教職員で指導する。また、安全を第一に考えて行事を展開する。	A	A		体育祭や球技大会の内容等が大きく変化したが、各行事成功で終わることができた。しかし、事前準備で詰めの甘さが見られるところがあった。

芸術科	授業と研究	主体的、対話的に取り組む姿勢の育成	指導を通して感性を磨き、自己肯定感・有用感を高めて意欲的に活動に取り組む姿勢を育てる。	A	A	B	・生徒の意欲を引き出す個別指導や課題設定等を工夫し、自分たちの作品を鑑賞し合う時間を持てた。 ・今年度3年から2年次に芸術を開講しないカリキュラムでとなったため、生徒には1年のブランクがあり、その対応のため新たな技能向上の指導が不十分であった。 ・西高EXPOに美書選択者授業作品を展示し、作品を多くの人に観てもらう活動を通して社会との関わりを実感させたい。 ・教科間での評価の差を少なくするため、芸術科共通のルーブリックの製作を行い、それに基づいて評価を行った。 ・新学習指導要領についての説明会等に参加し、理解を深めた。 ・今年度３学年には音・美どちらも受験に向けた実技指導を希望する生徒がいなかったため、進学指導は行っていない。２学年で希望する生徒には行っている。
			芸術を通して生活や社会と主体的に関わる態度を育てる。	A			
			芸術系に進む生徒への進路指導を、早期から適切に行う。	B			
			校内外の文化的発表の場を積極的に利用して、芸術選択生徒の主体的な制作・表現活動につなげる。	A			
		感性を高め、豊かな情操を養う授業の展開	幅広い活動（音・美・書）を通して、生涯にわたり芸術を愛好する心情を育てる。	A	B		
			幅広い活動（音・美・書）を通して、芸術的諸能力を伸ばす。	B			
			幅広い活動（音・美・書）を通して、芸術文化への理解を深める。	B			
		指導力の向上	教材研究を重視し、より効果的に表現・鑑賞能力を伸ばす方法を研究する。	A	B		
			音楽・美術・書道の連携を深めることにより、評価に関わる教科間の差を少なくする。	B			
英語科	授業	基礎・基本の定着	1年生および３年生において、少人数講座や習熟度講座編成を行い、わかる授業・効果的な活動を展開し、生徒の学力向上に努める。	A	A	A	**（成果）** ・１年生は全クラスで少人数講座を実施し、中学校から高校へのスムーズな接続を目指してきめ細かい指導を行った。また、添削指導を多く取り入れ、英作文も丁寧に指導することができた。 ・１・２年生では全クラスで単語テストや日々の課題、週末課題を継続的に実施し、学年全体で学習に向かう雰囲気作りと学習習慣の定着を図ることができた。 ・学力差の大きい３年生の理数探究科では、２単位の授業を習熟度別講座で実施し、学力層や希望進路に応じた効果的な指導を行った。 ・授業では、一斉指導に偏ることなく生徒が協働して取り組む機会を与えるよう努めた。生徒間での意見交流や学び合いを通じて、授業が活性化し、生徒が主体的に英語を発信する場面が増えた。個人で取り組む場面とのメリハリをつけることで、生徒は集中して学習に取り組むことができた。 ・学習意欲の低下やテスト等の取り組みが不十分に感じられる生徒については、教科担当者だけでなく、英語科の学年担当者や担任と連携を図りながら指導を行った。 ・ＡＥＴと連携して、GTECスピーキング対策や学期ごとのパフォーマンス課題に取り組んだ。年間を通じて計画的に取り組んだ結果、意欲的に英語を使う生徒が増えた。指導の際は、生徒に目指す力を示すとともに、AETとJTEとの公平な評価に努めた。 ・生徒にとって土曜講座が有意義なものに感じられるよう、１年生では英語の発信力向上に特化した講座を展開した。英検準２級の二次指導やGTECのスピーキングとライティングの指導を行うことで、生徒は楽しみながら積極的に取り組むことができた。 ・GTECスピーキングテストに向けて、実施方法や対策法を英語科で共有できた。 **（課題）** ・特に充実コースと理数探究科において、家庭学習の習慣が身についていない生徒が固定化している。担当者の工夫が必要である。 ・１年生の１学期中は中学校の復習を宿題としていたが、基礎を定着しきれない生徒もいた。夏休み以降の課題や指導の内容も含めて検討する必要がある。 ・パフォーマンス課題を極端に苦手とする生徒に対して、指導方法を工夫する必要がある。 ・指導評価の一体化、ルーブリック活用については改善を図ることができなかった。 ・１年充実コースと２・３年文系コースの指導に向けた議論は、各学年での共有に留まり、教科全体としての議論は進められなかった。 ・独自教科として次年度実施予定である『ローカルサイエンスイングリッシュ』の実現に向けて、理科教諭と連携して指導内容や指導方法を組み立てる必要がある。
			自立した学習者へと導くために、低学年での丁寧な指導に努める。１年生においては、中学から高校への接続をスムーズに行い、基本事項の定着と家庭学習習慣の確立を図る。２年生においては、小テスト、週末課題を自らの学習サイクルに組み込み、計画的に自学できる学習者へと導く。	A			
			小テストや定期テストにおける成績不振者に対しては、学級担任とも連携を取りながら、学習に対する意欲の喚起に努める。	A			
		コミュニケーション能力の養成	個人・ペア・グループ・一斉指導といった学習形態を効果的に用いて、アクティブラーニングを推進し、学力や学習態度の向上を図る。	A	A		
			１年生では、年２回のパフォーマンス課題を継続・発展させる。また、その取組を２年生でも継続し、ティームティーチングや土曜講座を活用して、英語を発信する意欲や態度を育む。	A			
			大学新テストを見すえた指導を工夫し、４技能の伸長を重点に置いた指導に努める。今年度より実施するGTEC Speakingテストや、難化傾向にある英検２次試験の対策についての研究を進め、指導法を英語科で共有する。	A			
	教材研究	指導・評価方法の改善	評価と指導の一体化を図るため、西高ルーブリックにおける評価基準や評価項目の研究を推進し、教員と生徒間でのさらなる共有を図る。	B	B		
			主体的・対話的で深い学びの推進に向けて、思考力・判断力を高める３年間を見通した指導法の研究を推進する。特に、１年生充実コースおよび２・３年生文系コースの生徒について、自己肯定感を高めて学習に意欲的に取り組めるよう、目指すべき生徒像を教員間で検討・共有して指導にあたる。	B			
		統合的活動の研究	英語での発信力を向上させるため、理数探究科の課題研究において、理科・数学と連携し英語による論文作成の技術を習得させる。	B	B		
情報科	授業	情報の適切な処理・活用能力および情報モラルを育成。	コンピュータ室の使用上の注意から徹底し、公共の場であることと意識させ、情報のモラルを実践させる。	Ａ	Ａ	Ａ	今年度より教科情報は普通科、理探ともに１年生からの履修となり、ワード、エクセル等の基本的な情報技術を身に付けることにより、１年生から他教科でもＩＣＴ活用を利用した授業が可能となった。検定取得については、ワープロ検定を１年生から受験できるようになり、受験の幅が広がり受験数は増加傾向にある。総合的な学習については、実務を基本とし生徒が求めているものを聞き、それに沿って学習効果が見えるようにしたことで継続することの大切さを学んだようであった。
		生徒の自主的、積極的な情報活用能力の育成。	基本的な情報技術を習得させ、情報の意義や役割を正しく理解させ、自ら活用する能力を育成する。	Ａ	B		
			ワープロ検定や情報処理検定の資格取得をサポートし、生徒に自信と進路希望を実現させる。	B			
	教材研究	指導力の向上。	３年生の総学(実務系)において、生徒の求める授業を考察し、生徒が満足し将来に活かせる授業展開を模索する。	Ａ	Ａ		